東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

ジャック・ガロのリュート曲《嬰ヘ短調の拍子付けのないプレリュード》：その解読と分析に基づく演奏解釈

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-02-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 水戸, 茂雄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/2000041

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ジャック・ガロのリュート曲
《嬰ヘ短調の拍子付けのないプレリュード》
～その解読と分析に基づく演奏解釈～

水　戸　茂　雄

東京音楽大学研究紀要 第47集 －2023－

ジャック・ガロのリュート曲《嬰ヘ短調の拍子付けのないプレリュード》
～その解読と分析に基づく演奏解釈～

水 戸 茂 雄

リュートは様々な種類が存在するが、およそルネサンス・リュートとバロック・リュートに分類される。この二つの違いは音楽の様式、以下に示した図1と図2の調弦[1]そして演奏技法によるものである。

1600年頃、フランスで新しいリュートの調弦が試みられるようになり、多くのリュート音楽家によって種々の調弦によるリュート音楽がタブラチュア譜に書かれた。そして最終的には1コースから6コースがファ、レ、ラ、ファ、レ、ラのD調弦に確立された。それに並行して新しい様式が形成されていった。その一つが、六線上に音符が散りばめられた、拍子付けのないタブラチュア譜による、いわゆる「拍子付けのないプレリュード」である。

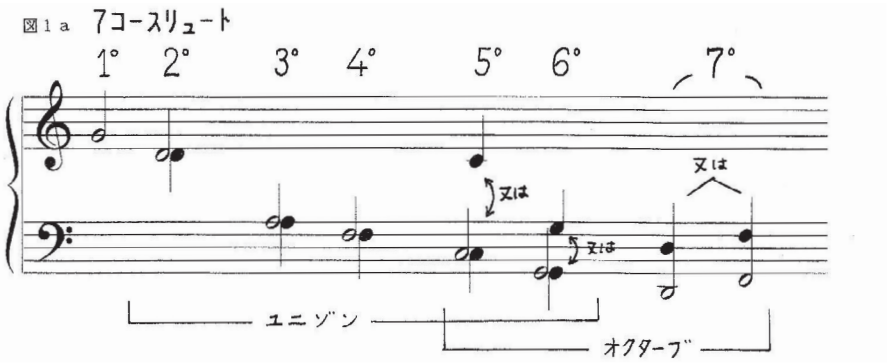


図1　ルネサンス・リュートの調弦

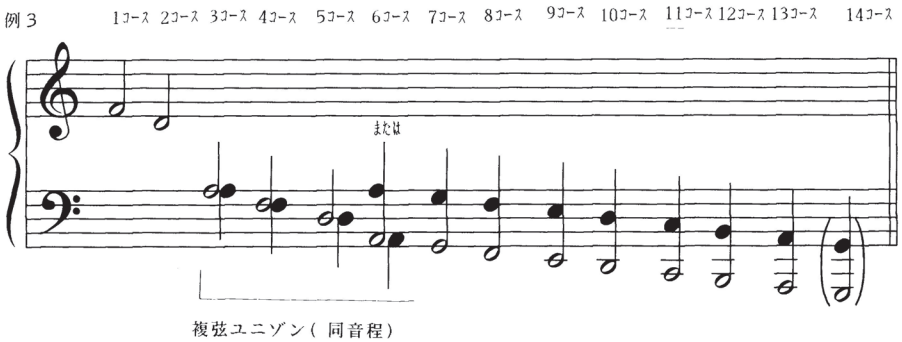


図2　バロック・リュートの調弦

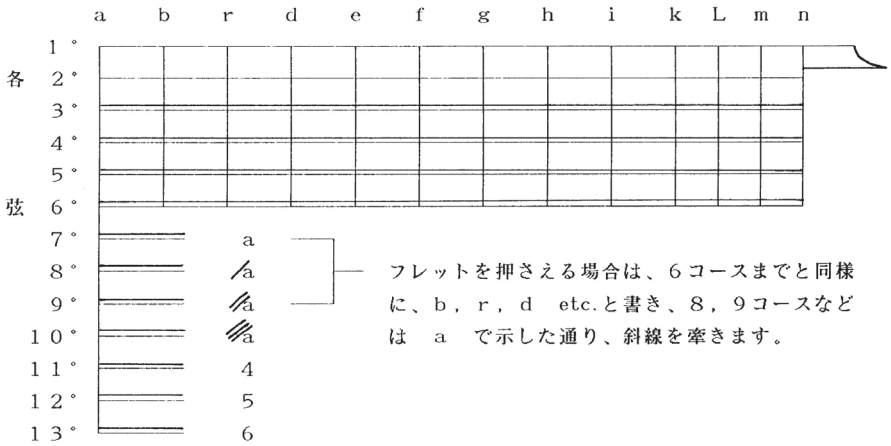


図3　タブラチュア譜の音を表すアルファベットのリュートの弦とフレットの位置

◇指の記号

左手の記号は、ギターの楽譜に於ける運指表示と同様に人差し指から 1，2，3，4 と数字で記します。
右手は、親指から 丨，・，‥，∴ と言う記号で記します。

図5

	親指	人差指	中指	薬指	小指
右手	丨	・	‥	∴	
左手		1	2	3	4

図4　指の記号

はじめに

拍子付けのないプレリュードは、17世紀のフランスのバロック・リュート音楽において最も重要な楽曲に位置づけられる。譜面には旗のない音が羅列し、それを演奏者が「良い趣味[(2)]」を持って演奏するという楽曲である。この音楽様式はクラヴサン（チェンバロ）に大きな影響を及ぼし、多くのクラヴサン音楽家が「拍子付けのないプレリュード[(3)]」を作曲した。

17世紀フランスで活躍したリュート音楽家ジャック・ガロ　Jacques Gallot（ ?-1685?）は当時のリュート音楽家の中でも傑出した人物で、優れた作品を多く残している。

ガロの作品にはライプツィヒ図書館にタブラチュアによる手稿譜が所蔵されているが、同じ資料中の手稿譜でも判読できるものと判読困難なものがある[(4)]。譜例1と2に実例として示すが、譜例1の《プレリュードニ短調》は整然と記譜され読みやすい。これに対して譜例2《プレリュード嬰ヘ短調》は速書きされて乱筆が目立つ。手稿譜には六線上にアルファベットが書かれている

が、即興で思い浮かんだ旋律を書き留めたためであろうか、速筆乱雑でインクの滲みや擦れがあり、判読が困難な部分が随所に見られる。《嬰ヘ短調》のタブラチュアを解読し、再現を試みるにあたって以下の工程に分けて考察していく。

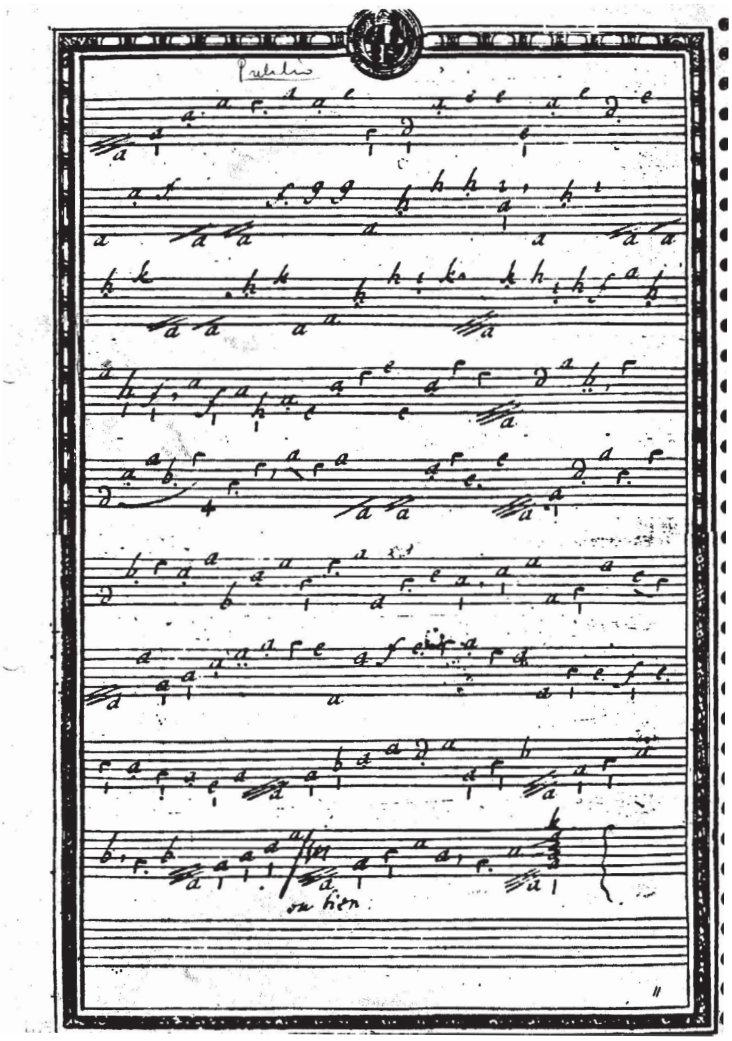
工程1. 譜例2のタブラチュアのアルファベットや記号を解読し、新たにタブラチュア譜を作成する

工程2. タブラチュア譜から五線譜に直す

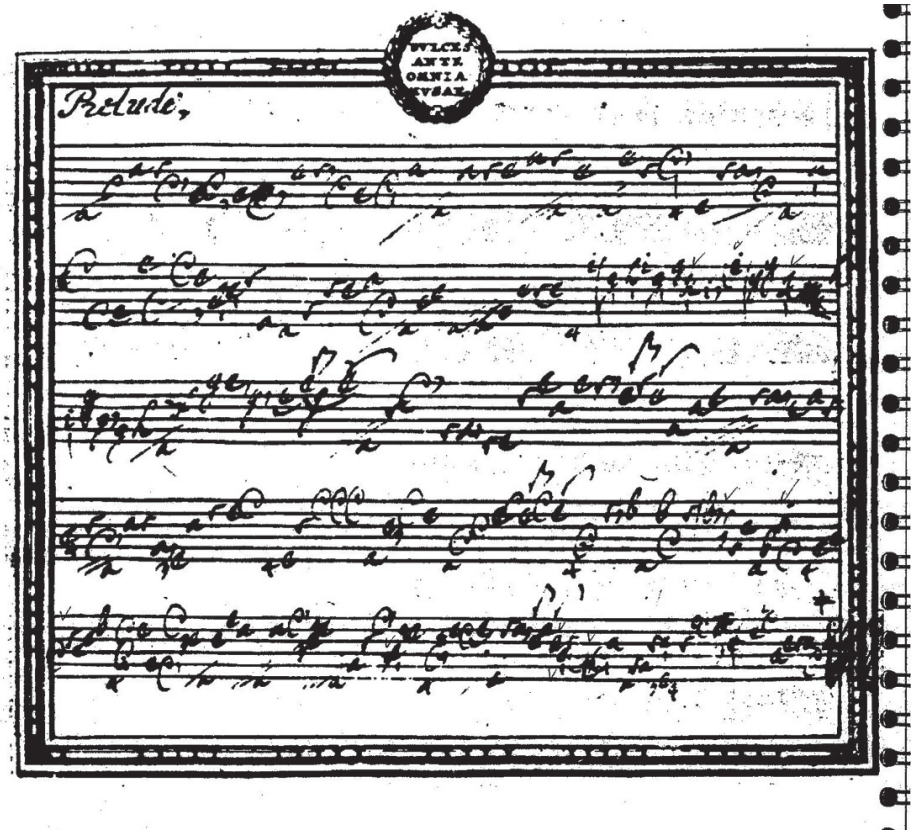
工程3. 和声分析と声部分けを行う

工程4. フレージングとパターン分け

工程5. 当時の演奏様式に沿った装飾やノート・イネガルを使用し、筆者の解釈を通して、ガロ作曲嬰ヘ短調の拍子付けのないプレリュードの再現演奏を試みる



譜例1　プレリュードニ短調 自筆譜



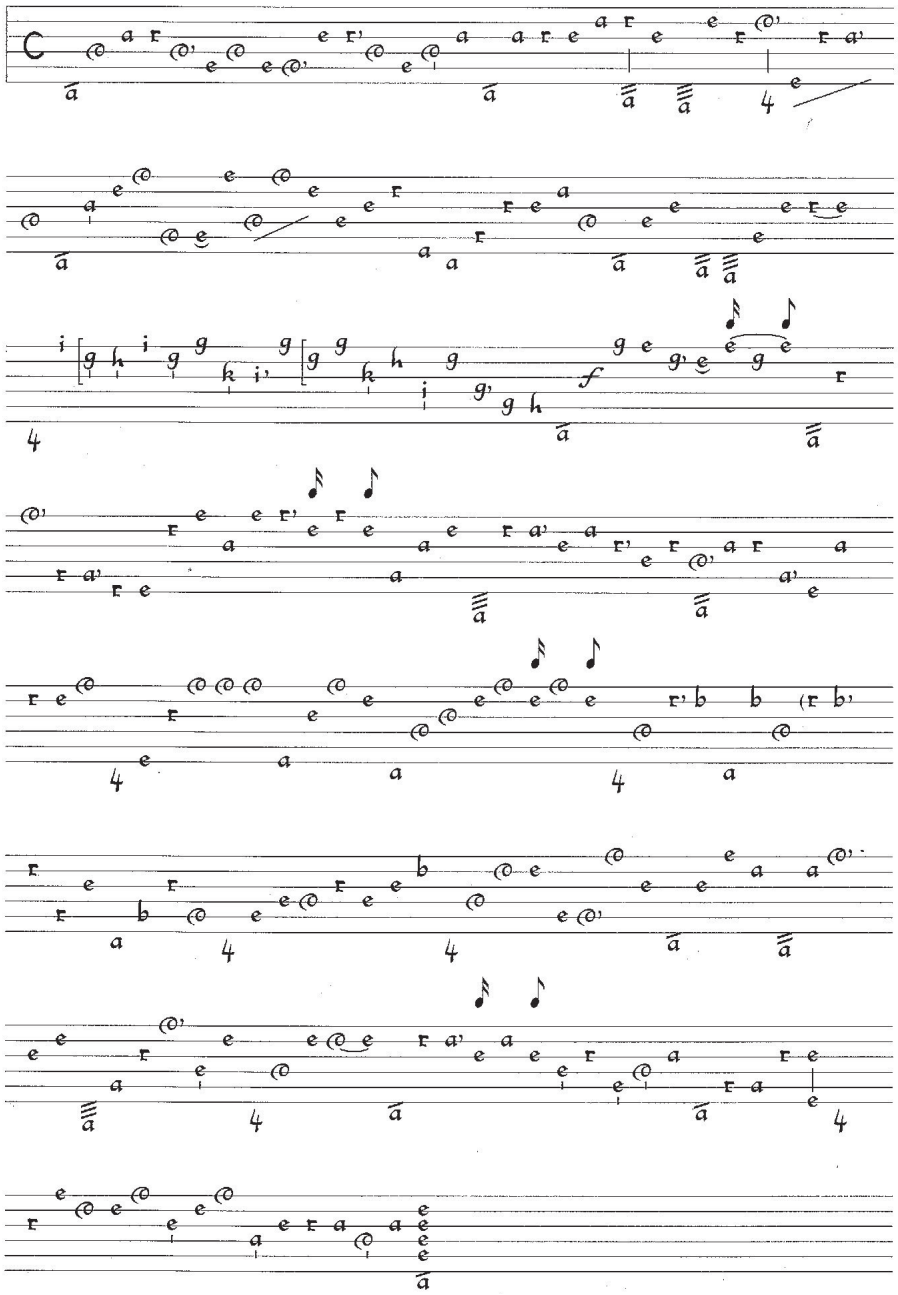
譜例２　プレリュード嬰ヘ短調 自筆譜

工程１. 譜例２のタブラチュアのアルファベットや記号を解読し、新たにタブラチュア譜を作成する

タブラチュア譜から五線譜へ変換するには図１と図２の調弦に従って音を判読する。

今回は1600年代フランスのバロック・リュートなので図２の調弦に従って行う。タブラチュア譜の音を表すアルファベットのリュートの弦とフレットの位置は図３に示す[5]。タブラチュア譜に書かれた左右の指の数字と記号は図４に示す。譜例２の上部中央の円形の中のDULCES ANTEOMINIA MUSAEという文字は「ミューズの甘い予感」という意味である[6]。また、タブラチュア譜の左上にはPreludeという文字が書いてある。楽譜本体については六線上に書かれたアルファベットを一つずつ読み取っていくと、譜例３のようになる。最後の部分は判読不能だが、終止するための主和音を補足した。

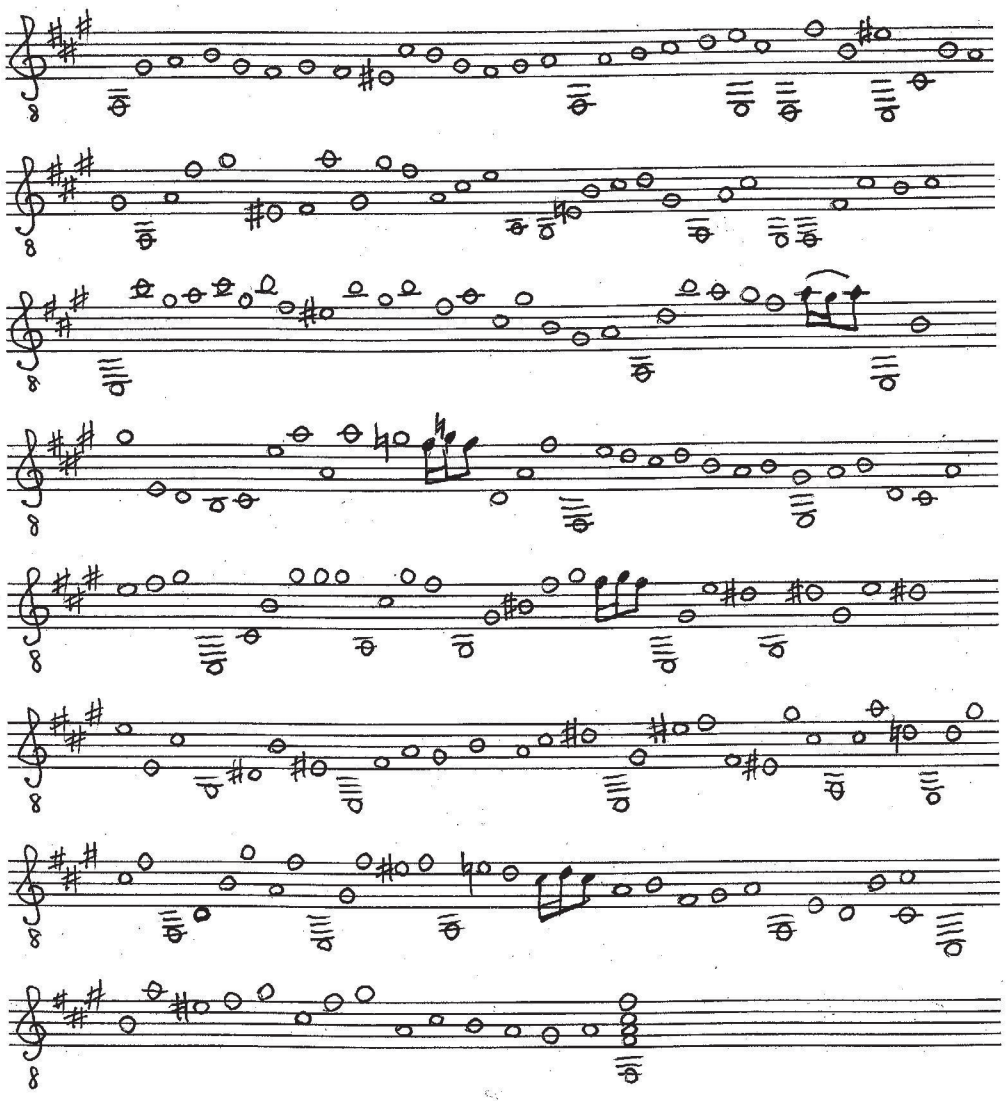
Prélude fa diése mineur(F-Sharp Minor) Jacques Gallot(?-1699以前)



譜例３　タブラチュア譜の清書

工程２. タブラチュア譜から五線譜に直す

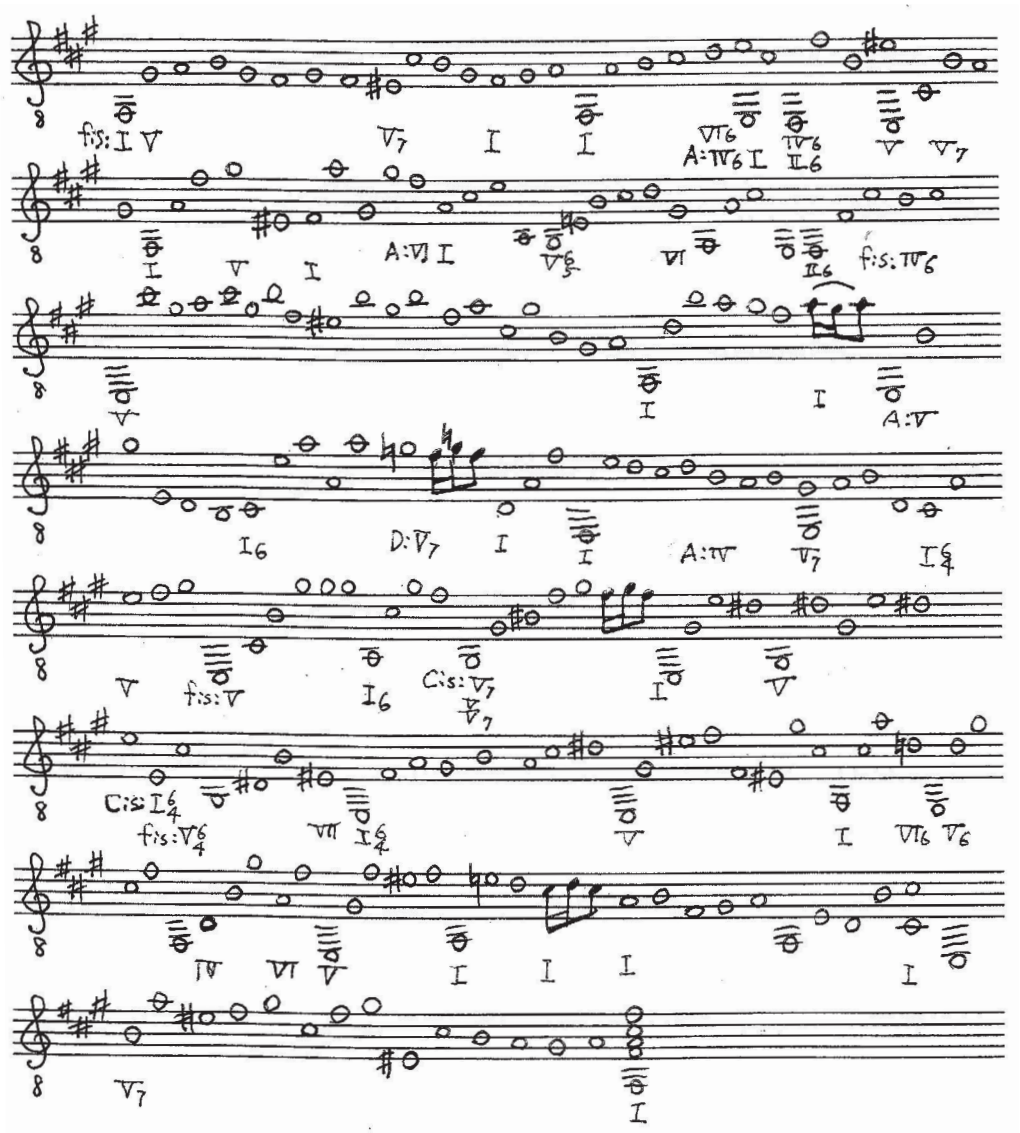
譜例３のタブラチュア譜の各アルファベットを図２と図３に沿って五線譜に当てはめて行く。ここでは譜例４のように一段譜で示す。



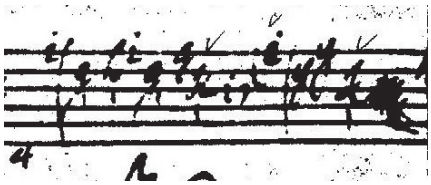
譜例４　五線一段譜

工程３. 和声の分析と声部分けを行う

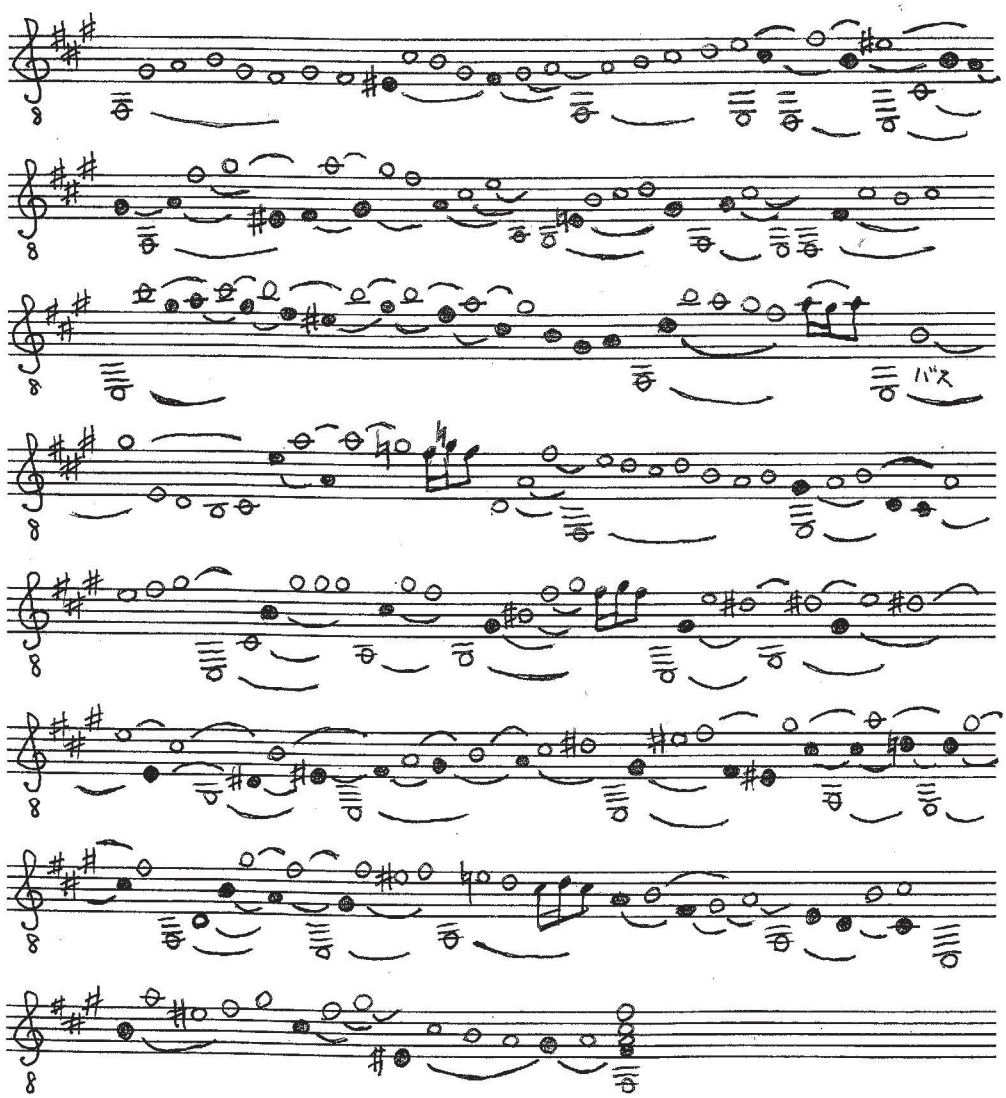
五線譜に直した楽譜を和声分析すると譜例５となる[7]。次にタブラチュア譜に書かれた右手の記号を読み取っていくと、譜例６のように親指の記号で示されたアルファベットの部位が中声部のラインを作っているのが分かる。中声部を黒音符にしてスラー記号で各声部を繋いでいくと譜例７のようになる。



譜例５　和声分析



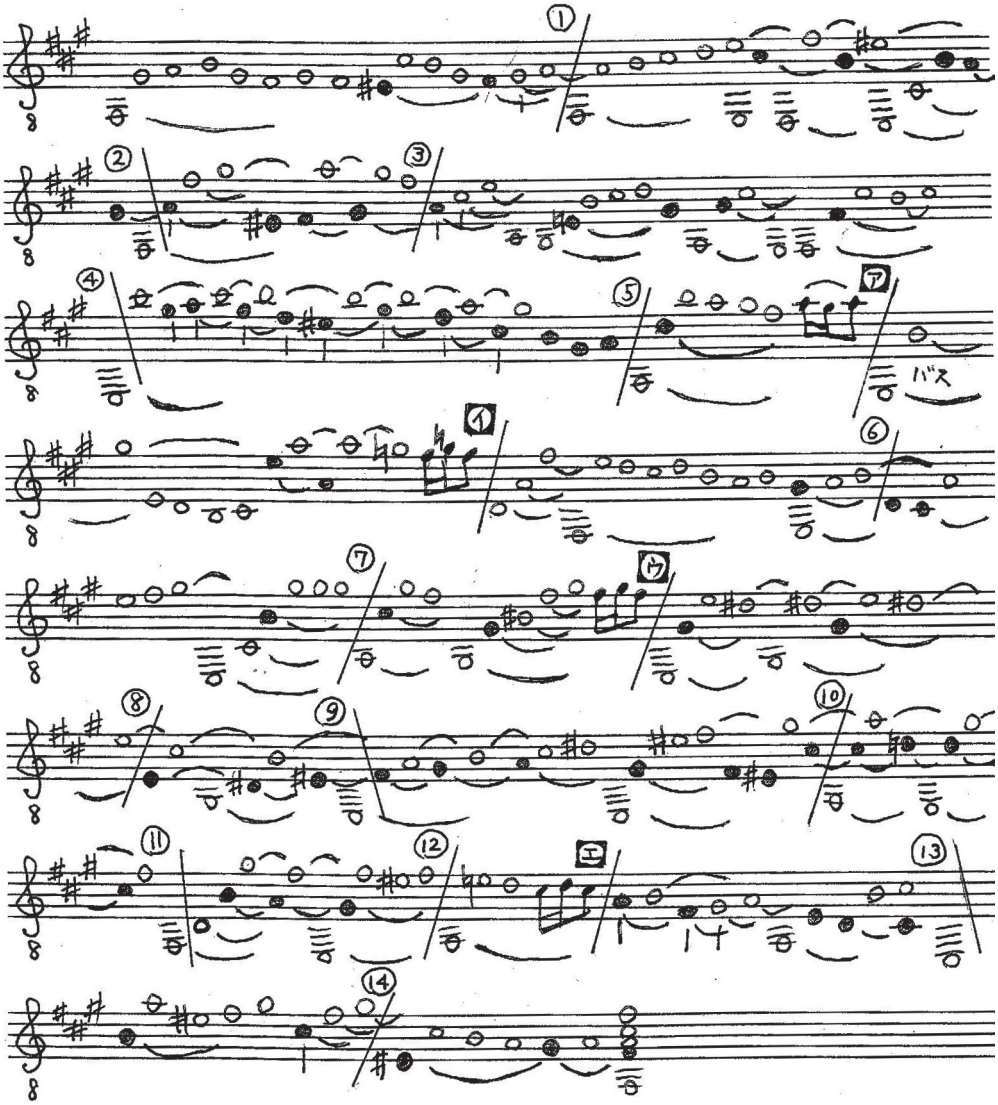
譜例６　親指の記号で示されたアルファベットの部位



譜例７　浮かび上がってきた中声部のライン（黒音符）

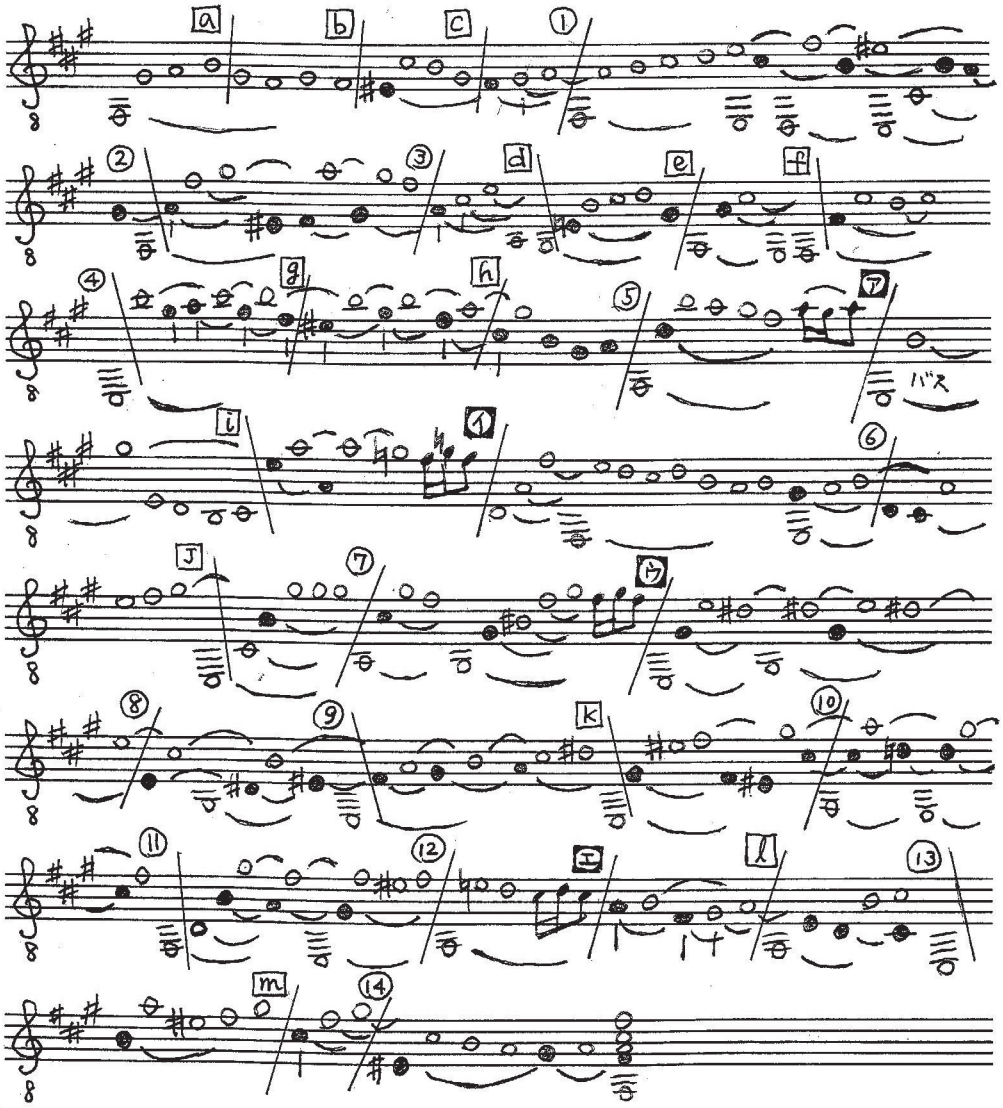
工程４. フレージングとパターン分け

和声分析（譜例５）と声部分け（譜例７）の次にフレージングを行う。タブラチュア譜に の音符が譜例８で示したア、イ、ウ、エの４箇所存在する。ここはガロがフレーズの目安として書いたと思われる。次に楽曲の始まりから㋐までのパートでは①、②、③、④、⑤の箇所でフレージング、同様にイからウでは⑥、⑦でフレージング、ウからエで⑧、⑨、⑩、⑪、⑫でフレージング、エから楽曲の最後で⑬、⑭のフレージングを行う。



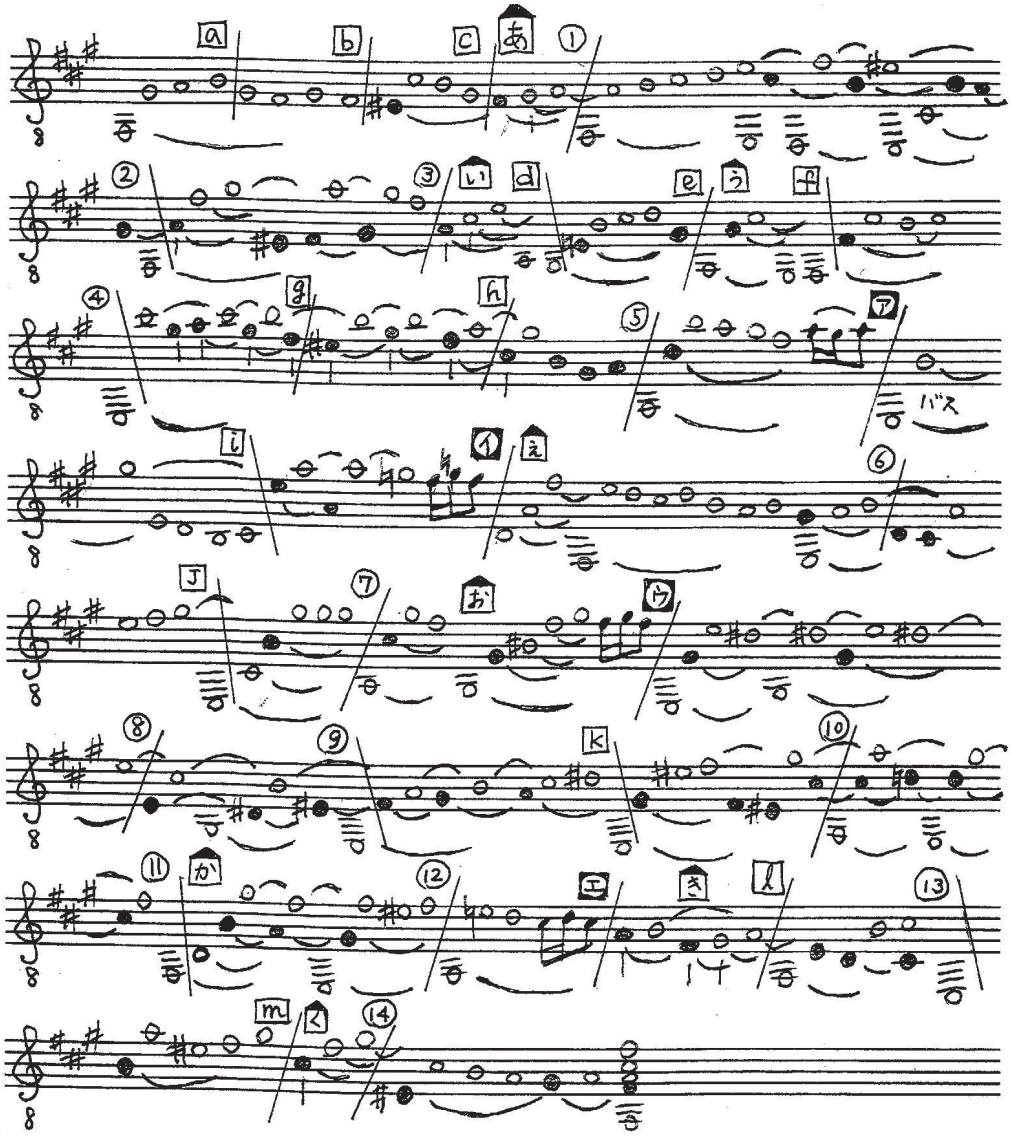
譜例８　フレージング

各パートのフレージングが出来たので、次にさらに細かくパターンに分ける。
譜例９のようにa、b、c、d、e、f、g、h、i、j、k、l、mに分けた。



譜例９　パターン分け

次にフランスのバロック・リュートの奏法として使用されるスティル・ブリゼが、譜例10のあ、い、う、え、お、か、き、くの箇所に書かれている[8]。ここは和音として演奏すると同時に、多声部として音を保持しながら演奏しなければならない。



譜例10　あ～くのスティル・ブリゼの箇所

工程５. 当時の演奏様式に沿った装飾やノート・イネガルを使用し、筆者の解釈を通して J.ガロ作曲　嬰ヘ短調の拍子付けのないプレリュードの再現演奏を試みる

譜例２の自筆譜で、ところどころアルファベットの右横に付けられた　’　はリュート・タブラチュア譜におけるアポジャトゥーラの記号である[9]。演奏にあたり作曲者が付けた箇所の装飾を全て忠実に演奏する必要はなく、下からのアポジャトゥーラや上からのアポジャトゥーラ、ノート・イネガル[10]等は演奏者自身の良い趣味とセンスに委ねられる。

以上、記述したことを踏まえて筆者が実演したサイトを掲載しておく[11]。

Pièces in F-Sharp Minor(Excerpts):Prélude
https://youtu.be/-9ArmH3Jm5Y

おわりに

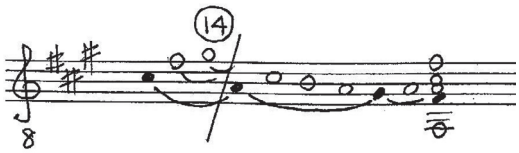
17世紀のフランスに於けるリュート調弦の転換は、音楽様式や演奏様式を大きく変えた。ルネサンス・リュートに於ける４度音程の調弦と異なり、３度音程のバロック・リュートの調弦は、音程が狭い故に異弦間で２度音程を容易に保持することができる。例えば譜例１の３段目の終わりから４段目にかけての下行スケールは、２度音程を響かせながら進行している。複数の鐘が鳴るような効果を出す「カンパネラ奏法」である。譜例２では①、②、⑥、⑭、ウなどで和音を響かせる箇所や、狭い音程で２声が進行する箇所など、２度音程の不協和音が心地よく響く。タブラチュア譜を解読する際に、この効果の見落としがないか留意する必要がある。さらに、フランス音楽を演奏する時に感じることは、フランス語の言葉の響きからフランスのバロック・リュート音楽が生まれているということである。この点については、これからさらに事例を研究していく中で、論じていきたい。

（本学講師＝特別実技科目　リュート担当）

注：

(1) 図１ルネサンス・リュートの調弦は１コース（一番高い音の弦）から６コースまでの開放弦がソ、レ、ラ、ファ、ド、ソと調弦される。１コースは単弦、２コースからはユニゾンまたはオクターブで複弦となる。
図２バロック・リュートの調弦は１コースから６コースまでの開放弦がファ、レ、ラ、ファ、レ、ラと調弦される。１コースと２コースが単弦、３コースから５コースまでユニゾンで複弦、６コースはユニゾンまたはオクターブで複弦、７コースからはオクターブで複弦となる。
(2) 17世紀のフランスにおいて、貴族のサロンで才媛や文化人が集い、礼儀作法、文学、哲学や音楽などが洗練され極められたプレオジテPréositéという貴族趣味。この中でフランス・バロック・リュート音楽は開花した。
(3) 拍子付けのないプレリュードPrélude non mesuré　17世紀のフランスでリュート音楽たちによって、音符が羅列された拍子付けのない自由な形式のプレリュードが作曲された。旗のあるもの、ないものが見られる。その後ドイツ圏の国々に導入され様々な音楽家たちによって作曲された。
(4) ライプツィヒ図書館　Leipzig,Musikbibl. Der Stadt.Mus.ms.Ⅱ 6.14

(5) 図3タブラチュア譜の音を表すアルファベットのリュートの弦とフレットの位置
譜例3の冒頭部分を例にあげると、/aは第8コースの開放弦なので＃ファ、次のdは第4コース第3フレットで＃ソ、次のaは第3コース解放弦でラと置き換えることができる。
(6) DULCE ANTEOMNIA MUSAE 自筆譜に書かれた不明瞭なこれらの文字の解読を本学声楽講師　エルマンノ・アリエンティ Ermanno Ariennti 氏にご協力頂いた。
(7) 和声分析　本学付属民族音楽研究所チェンバロ講師　坂　由里氏にご協力頂いた。
(8) スティル・ブリゼstyle brisé 「分散様式」の意。異なる声部間に和音を分散させた音形を指す。　柴田南雄　編　『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社）9, 227.
(9) アポッジャトゥーラappoggiatura「倚音」のこと。旋律的な装飾の一つで、普通は和声音に対して一音上方、あるいは下方の音を指す。　柴田南雄　編　『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社）1, 124.
(10) ノート・イネガルnotes inégales　均等な音価で書かれた音符を不均等で演奏する事。
不等化の程度は（すなわち2つの音符間の長短の割合）はわずかに感じられるものから複付点音符まで、曲の性格や演奏者の趣味によって変えることができた。　柴田南雄　編　『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社）12, 380-384.
(11) 筆者は⑭以降の最後のフレーズを譜例11のように中声部を黒音符＃ドからの繋がりとして、＃ド-＃ミ-＃ソ-＃ファよりも＃ド-ラ-＃ソ-＃ファと弾く方が曲の流れとして自然と感じるのでCDではこのように演奏した。



譜例11　最後のフレーズ

参考文献

Veilhan, Jean-Claude
1986　フランス・バロック音楽　解釈と演奏原理　J.C.ヴェイヤン　著　細野孝興　訳　パリ・（A.ルデュック社）　PP.20-55

Frotscher , Gotthold
1981　バロック音楽の演奏習慣―バロック音楽の楽典―　山田貢　訳　（シンフォニア）　PP.114-137

フェレデリック　ノイマン
1992　正しい装飾音奏法　為本章子　訳　（音楽の友社）

小川　伊作
1994　17世紀フランス・リュート音楽研究（2）　－ジャック・ガロのリュート曲集およびその緒言をめぐって－　大分県立芸術文化短期大学　第32巻

ロジェ　ジュベール
2010　十七世紀フランス文学入門　原田　佳彦　訳　（白水社）

玉田　敦子
2012　「啓蒙」と「熱狂」 フランスにおける「趣味判断」の由来と近代性　中部大学人文学部研究論集第29号. Pdf

磯山　雅
1990　バロック音楽　豊かなる生のドラマ　（NHKブックス）　PP.88-89

水戸　茂雄
1992　ルネサンス・リュート教則本　N&S古楽研究会　P.7, 16
1993　バロック・リュート教則本上巻　N&S古楽研究会　P.12, 16, PP.22-31
1993　バロック・リュート教則本下巻　N&S古楽研究会 PP.10-13

楽譜

ライプツィヒ図書館：Leipzig,Musikbibl. Der Stadt.Mus.ms. Ⅱ 6.14

Manuscrt Vaudry de Saizenay

1980　Bibliotèque municipale, Besançon. 279. 152 et 279. 153 1699. Minkoff reprint

Manuscrit Milleran

1980　Tablature de Luth Française (BN, F-Pn ms Rés. 823). Minkoff reprint

事典

佐野　光司；

1994　「アポッジャトゥーラ」 柴田南雄　編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社）1, 124.

関根　敏子；

1994　「ジャック，ガロ」 柴田南雄　編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社）1, 210.

関根　敏子；

1994　「スティル・ブリゼ」 柴田南雄　編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社 9, 227.

関根　敏子；

1996　「ノート・イネガル」 柴田南雄　編 『ニューグローヴ世界音楽大辞典』（東京：講談社 12, 380-384.